補陀洛山総持寺

１．概要

承和年間(834-847 年)、高房が任地の太宰府に向かう途中、息子の政朝が川に落ちてしまったが、翌朝、政朝が大きな亀の背中に乗って帰ってきたという。この亀は高房が前日に漁師から買い取り、川に放した亀であった。

喜んだ高房は唐人に観音像を刻む香木を探してくるように頼んだ。数十年後、『高房卿の求めに応じて海を渡す』と刻まれた香木が流れ着いたが、この時、高房は既に亡くなっていた。

中納言になっていた政朝は、香木を持って都に行き仏師を探したが優れた人が見つからなかったので、長谷寺に行き観音に祈ったところ、童子が現れた。童子はこの香木を材とし、亀に乗った千手観音を刻んだという。

仁和 2 年(886 年)にこの仏像を本尊として祀ったのが総持寺の創始と伝えられている。

亀について一言：2 世紀頃中国で生まれた道教では仙人が住むという蓬莱山を背負っているのが亀といわれ、中国では亀は竜と共に神聖な動物とされてきたようである。また、亀は神仙思想の世界と現世を繋ぐ動物とも言われているという。

現在の総持寺の規模は特に大きいとはいえないが、元亀年間(1570-72 年)に織田信長によって焼き尽くされるまでは非常に規模の大きな寺だったらしい。

２．総持寺 1 丁目

総持寺 1 丁目は、真言宗の寺院があり寛平 2 (890)年創建という極めて古い歴史を持つ“まち”です。

西国 32 箇所霊場の一つにも数えられ、参拝客も多かった。江戸期以降においても、寺院の地位は今とは比べ物にならぬほど高いものがあり、しばしば政治的権力をも有するものであった。総持寺にあっては、開基者は藤原中納言山蔭という人物であったが、一族が代々に渡り氏寺的に保護したこと、比叡山の延暦寺の末寺に位置づけられたことによりその存在は大きかったという。